

郷土博物館・文学館だより



現在、当館では3月20日（火・祝）
まで特別展「渋谷に残された版木」を開
催しています。

東京都指定有形文化財『徒然草』版木

特別展 渋谷に残された版木

—国学者塙保己一とその遺産— 開催中です

塙保己一は、失われかけた古い時代の文献を
広く集め、『群書類従』666冊を編纂したこと
で知られている江戸時代の国学者です。7歳の
時に失明した保己一は、その優れた記憶力をも
って、『群書類従』のほか、数多くの編纂・出版
事業をてがげ、日本の歴史学・文学研究などの
発展に大きく貢献しました。

特別展では、東京都の有形文化財に指定され
ている『徒然草』『元暦校本万葉集』の版木をは
じめ、区内にある社団法人温故学会で所蔵する
保己一関係の資料を中心に展示を行い、保己一
とその後継者たちが行ってきた事業について紹
介しています。



塙保己一画像と愛用の机

かつて渋谷駅前にあった学校 — 渋谷小学校 —

渋谷駅の東口を出ると、正面に大きなガラス張りの新しいビルが見えてきます。これがこの春、4月26日にオープン予定の地上34階・地下4階の複合ビル「渋谷 Hikarie」です。

さてこの場所、このビルが建つ前は、まだ皆さんの記憶に新しい建物、東急文化会館がありました。でももっと昔の約140年前、ここには子どもたちが通う小学校が建てられたのです。

江戸時代、庶民の学習の場として寺子屋がありましたが、そのほかにも学者が武士の子どもに勉強を教える家塾や私塾がありました。やがて時代が江戸から明治になると、政府は明治5年(1872)に学制を公布します。これにより、日本の近代的学校制度が始まりました。渋谷でもこの新しい制度を受け、各地域でいくつかの家塾・私塾を一つにし、小学校を開校する願書が東京府に提出されました。

現在の渋谷駅周辺は当時渋谷宮益町と中渋谷村でしたが、ここに住む人たちも学校をつくるために動きました。すでに個人で運営していた金長学校の金長良三と、秋永塾の秋永桂蔵の二人を新しい学校の先生にすることで話がまとまり、渋谷小学校の開校の準備が始まりました。

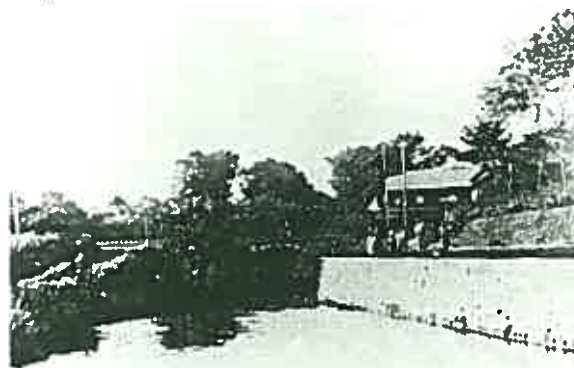
学校を開校するにあたって、地元の三井八郎右衛門・森島伝兵衛・野口清右衛門の3人が中心となり、この付近の人びとから建築資金を集め、校舎を建てました。茅ぶき平屋建ての校舎でした。土地を提供したのは成富清風という方で、約1,400㎡だったようです。

ところが校舎は建ったものの、公立小学校とはいいいながら、公費は少ししかもらえませんでした。

そこで学校の経費は、渋谷川に架かる宮益橋のそばにあった、三井八郎右衛門の水車の利益金でまかなったといわれています。当時の渋谷川は、今と違い水量も豊富だったため、渋谷川沿いには多くの水車が動いていました。

こうして渋谷小学校は、明治8年3月15日に渋谷で一番最初に開校したといわれています(渋谷小学校『沿革誌』より)。ただし、この開校記念日については、東京府に提出された「開校届」と相違があります。書類で一番古い学校は現在の区立千駄谷小学校で、明治9年6月28日が開校日です。渋谷小学校は翌年3月17日で二番目になります。残念ながらこの開校日の違いは、まだよくわかっていません。

渋谷小学校はその後、昭和18年(1943)1月に強制疎開で校舎は壊され、この場所から美竹町(現在の渋谷1丁目)に移転します。移転後の土地は東京急行電鉄株式会社が取得、戦後の昭和31年12月には東急文化会館がオープンしました。一方渋谷小学校は、昭和23年に最初の移転先から旧梨本宮邸(同町内)へと移り、やがて平成9年4月に大和田・大向小学校と統合し、神南小学校に生まれ変わりました。



明治34年頃の渋谷川と宮益橋(右側が小学校)



演劇人・岩田豊雄と作家・獅子文六

獅子文六（明治 26-昭和 44）は、本名を岩田豊雄、横浜で絹物貿易商を営む家に生まれました。大正 2 年（1913）慶應義塾文科を退学後、文学で身を立てる決心をしますが、大正 11 年、父の遺産で渡ったフランスで、たちまち演劇の魅力に取り付かれます。

大正 14 年にはフランス女性の妻マリ・ショウミーをともなって帰国、すぐに長女・巴絵が誕生します。演劇への熱意は日本でも薄れることはなく、ヴィルドラックやジュール・ロマンなどの戯曲を翻訳する一方で、文藝春秋社経営の新劇協会に入り、演出で手腕を発揮します。しかし、菊池寛と意見が合わず、翌年、岸田国士と新劇研究所を創設します。その後も岸田とともに、昭和 4 年（1929）には劇団喜劇座を作り、昭和 7 年に妻・マリを病で亡くした後は、昭和 12 年に文学座を立ち上げています。しかし、当時の日本で、戯曲や演出で暮らしてゆくことは困難を極めました。

こうした事情から、演劇人・岩田豊雄は作家・獅子文六へと転身します。ペンネームの獅子文六は、昭和 8 年から『新青年』誌上で使い始め、『金色夜叉』の昭和版として同誌に連載した「金色青春譜」は、読者に支持されます。さらに、昭和 11 年から『報知新聞』夕刊の連載小説として書いた「悦ちゃん」は、それまでの日本にありがちな、暗い継母物語を突き抜けた明るさで大人気となり、主人公の被る「悦ちゃん帽」が百貨店で売り出されるほどでした。

ユーモアに溢れた家庭小説作家としての地位を築いた文六は、昭和 9 年の再婚を機に千駄ヶ谷で暮らします。文六のこの地への愛着は、戦後発表した『娘と私』の中で「外国の郊外駅のような、省線千駄ヶ谷駅前の感じも、ますます好ましいものになった。また、その頃、地下鉄が開通して、青山まで歩けば、その利用もできた。便利で、閑静で、気安い点が、私に、この土地を好ませ、満足させた。私はここに十年間、住んだが、そんなに長く、定住した土地はなかった」と述べていることからうかがえます。

太平洋戦争が勃発すると、その衝撃は戦争に批判的だった人びとにも波及します。文六もまた戯作の筆を捨て、本名の岩田豊雄を用いて、昭和 17 年、『朝日新聞』に「海軍」の連載を開始、主人公・谷真人の青春を描きながら、日本海軍の伝統的精神を讃えます。

戦後、追放仮指定という苦渋を味わいますが、昭和 27 年から『毎日新聞』に連載した「てんやわんや」の作者として、獅子文六の名は再び脚光を浴びることになりました。

『娘と私』（全）
昭和 37 年 新潮社

昭和 28 年 1 月から『主婦之友』に連載した「娘と私」は、文六の唯一の自伝的作品で、「娘」は長女・巴絵がモデルである。昭和 30 年・31 年に主婦の友社から『娘と私』上・下巻として出版された。



収蔵資料紹介

「氷冷蔵庫」



奥行き 45cm
幅 48cm
高さ 80cm

戦前の「冷蔵庫」は「氷冷蔵庫」のことをいいました。明治

三六年（一九〇三）、第五回内
国勧業博覧会で人造氷を使っ
た家庭用冷蔵庫（氷冷蔵庫）が
初めて展示され、明治四〇年
（一九〇七）頃には販売が開始
されました。構造は、上下に二
つの扉があり、それぞれの内側
にはブリキが張られ、外郭との
間には断熱材となる木炭やフ
エルトなどが詰められていま
した。上部の扉を開け、中に氷
を入れ、下部に食品を入れま
す。そうすると、上部の氷の冷
気が下りてきて、食品を冷やす
という仕組みでした。簡単に言
えば、現在のクーラーボックス
と同じです。

冷蔵庫に使う氷は、毎日氷屋
がリヤカーなどに積んで運ん
で来て、密の注文に合わせ、一
貫目（二千匁、三、七五kg）、
二貫目というように、必要な分

だけノコギリで切って売って
くれました。

各家庭では、氷に手拭を巻い
たり、扉をなるべく開けないよ
うにしたりと、氷が解けない工
夫をしたといえます。しかし、
氷冷蔵庫はあくまで食品を痛
ませないためのものであり、基
本的には食材は毎日買いに行
く必要がありました。

「家庭用電気冷蔵庫」は、昭
和五年（一九三〇）に芝浦製作
所によって国産第一号機が完
成しました。一台七二〇円とい
うこの冷蔵庫は、当時庭付き一
戸建ての家が買えるほど、高価
なものでした。

昭和八年には、三菱と日立が
電気冷蔵庫を発売しましたが、
同様の価格であったため、氷冷
蔵庫は昭和三〇年代までは一
部の家庭で使用され続け、電気
冷蔵庫が普及するにつれて消
えていったのです。

【今後の展示予定】

特別展「渋谷に残された版木」

平成 24 年 3 月 20 日（火・祝）まで

*江戸時代の国学者・塙保己一とその子孫の
業績を紹介しています。

「渋谷現代短歌優秀品作展示」

平成 24 年 4 月 1 日（日）～4 月 15 日（日）

*第 12 回渋谷現代短歌の優秀作品を展示し
ます。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を 13:00 から
に変更しています。詳細については、お問合せくださ
い。

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1人310名以上の団体料金
や60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.19

平成 24 年 3 月 1 日発行